

莊舄経春只越吟 菜根滋味憶山林
窅堵波原難作宅 磨兜堅已自題箴

夕陽千樹鳥声寂 涼月一庭花影深
惟余結習殘書在 窺見羲皇以上心

【読み】

莊舄（そうせき）春を経て ただ越を吟ず 菜根（らいこん）の滋味 山林を憶（おも）う
陽（せきよう）千樹 鳥声寂（しず）かに 涼月（りようげつ）一庭（いってい）花影深し 窅
堵波（そつとは）原（もと）より宅（たく）を作（な）し難（がた）く 磨兜堅（まとうけん）
すでに自（みずか）ら箴（しん）を題す 惟（ただ）余（あま）す結習（けっしゅう）殘書在
（あ）りて 窺い見る羲皇（ぎこう）以上の心

【意味】

莊舄（そうせき）は春を経て、なお越の国の歌を吟じている。菜の根の素朴な味に、山林の生
活を懐かしむ。夕陽の中、千の樹々の間で鳥の声は静まり、涼しい月の光の下、庭の花影が深く沈
んでいる。仏塔（窅堵波）には本来、俗人の家など建てられなくて、修行者の磨兜堅（まとうけん）
（ん）はすでに自ら戒めの言葉（箴）を刻んでいる。ただ自分に残るのは、かつての習慣と、残さ
れた書物ばかり。だがそれらを通じて、古代の聖人・伏羲よりもさらに上にある真理の心を、ほ
んのわずかにでも感じ取ることができるだろうか。

* 莊舄：春秋時代、楚の音楽家。越に亡命した後も故国楚の歌を吟じ、郷愁の象徴とされる人物 * 菜根：野草の根
* 窅堵波：仏塔 * 磨兜堅：修行者 * 結習：前世または過去の行為・習慣の名残 * 羲皇：伏羲氏。古代中国の理想の聖王。

【出典】秋山学圃為張韋齋明府題（清・李紱）

秋山学圃（しゅうがくほ）張韋齋明府の為（ため）に題す
李紱が、秋山学圃という人物（＝張韋齋明府）に題した詩